2011. 9. 14　朝日新聞

井上道義の 未来だった今より

♫ ヘンデルしてデル

クラシックの音楽は、もちろん「誰かが、どこかで、あるとき」演奏されることを希望して書いたものだ。人間は、譜面を重ねればエベレストやキリマンジャロよりも高いほどの多くの作品を作ってきた。その中からなぜか生き残って現在、人々に愛されているものを、クラシックと呼ぶ。

その流れの源流を作ったバッハ、それも若い頃のバッハのオルガン曲など、目立ちたがり屋のサッカー選手がゴールした時のとんぼ返りや、神に感謝！風の大ジェスチャーのようだ。近くにいたら浮揚とするほどの自信が体からあふれる人物だっただろう。

彼のような天才でもライバルはいた。ヘンデルだ。「お金がかかりすぎて大層な舞台装置がいるオペラではなくて、もっと音楽中心な、有名なメサイアのようなオラトリオ形式のものを作り上げる」と言って、多くのソロと合唱とオーケストラによる舞台作品を書いた人だ。ベートーベンの第九の終楽章だってオラトリオ形式だ。

それは、僕が毎年のように舞台にのせてきた「コンサートオペラまたはセミステージオペラ」の考え方に似ている。オーケストラと歌い手が両方とも舞台にいるオペラだと言える。「暗い低いオーケストラピットで、楽器の持つ色を半分は消され、歌手のためとはいえ、お客さんの見えないところで演奏をする」というのは、「目立ちたいアーティスト」の心理に合わない。

今、ヘンデルの音楽を題材に、俳優の西村雅彦さんと、僕が演じる（指揮はしない）オラトリオの公演を、金沢で17日、名古屋で22日、大阪で23日にやる。暗譜でなく暗記しないと……カツラをかぶってヘンデルです。

（オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督）